

## 2-4 危機管理対策

### (1) 浄水場の耐震化や水道管の耐震強化などの取組の認知度

問 水道局では、震災や事故などに備えて、浄水場の耐震化や水道管の耐震強化（※1）、管路のネットワーク化（※2）などを進めています。

この取組について、ご存知ですか。

※1 耐震性の低い水道管を耐震性の高い管に取り替えています。

※2 震災等により水道管路に異常があった場合でも、断水・濁水を最小限に抑えるために、他の系統からの給水を可能にするための管路の整備拡充を図っています。

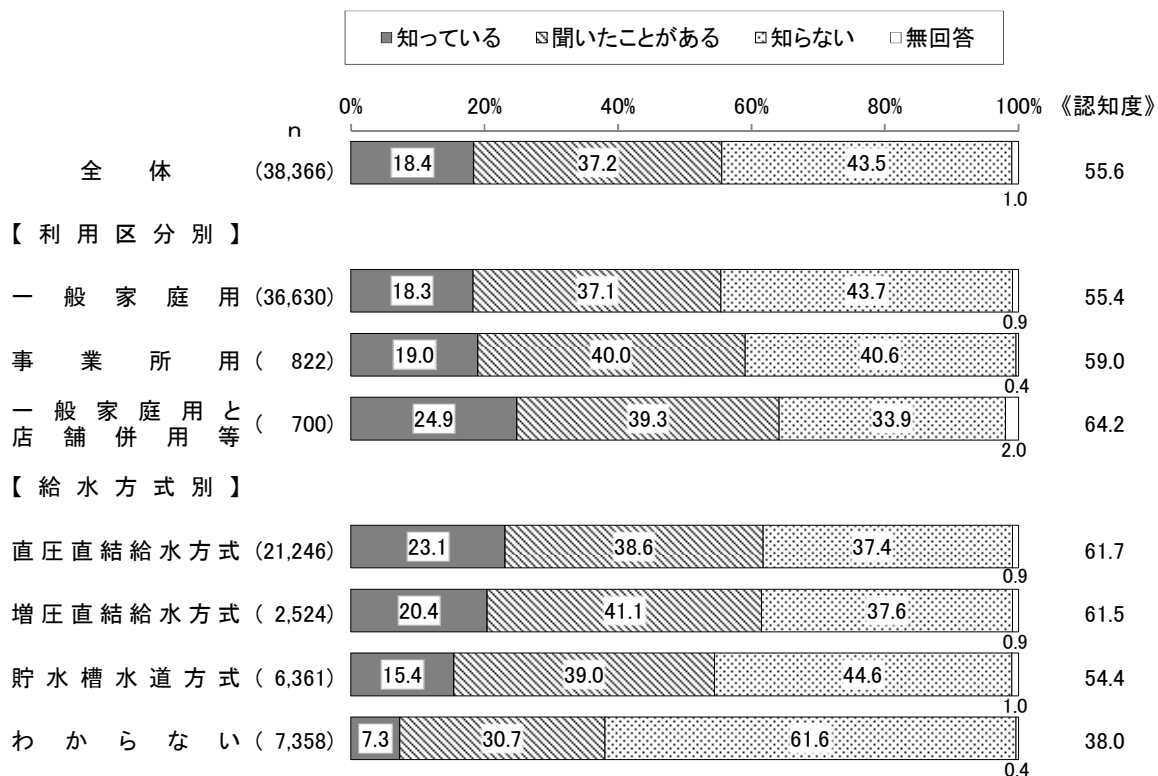
1) 知っている                      2) 聞いたことがある程度                      3) 知らない

[C : 問8]

#### [調査結果]

#### ① 浄水場の耐震化や水道管の耐震強化などの取組の認知度（利用区分別、給水方式別）

〈図表2-4-1〉



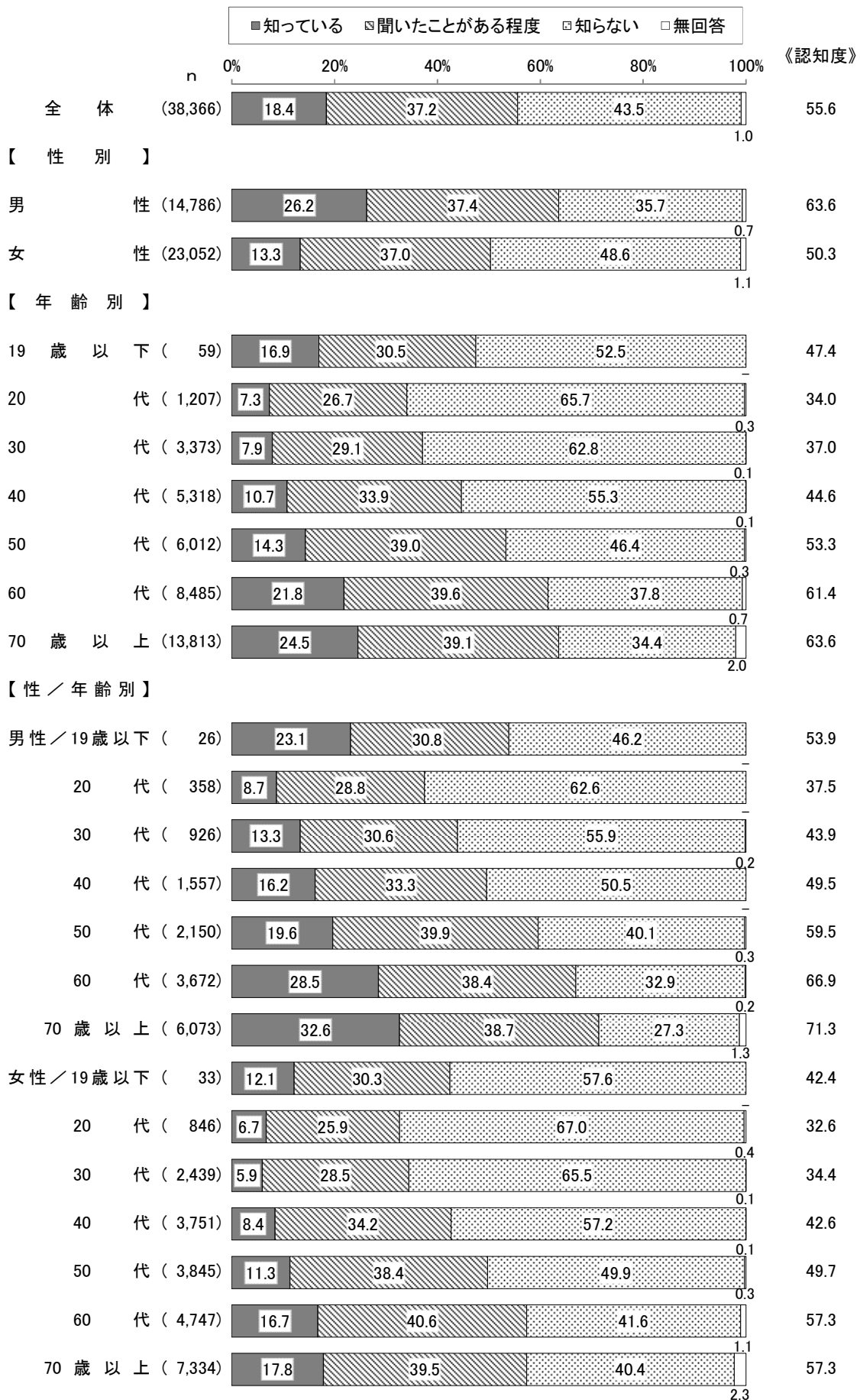
#### <特徴>

○全体でみると、「知らない」が43.5%で最も高くなっている。次いで「聞いたことがある」が37.2%で、「知っている」(18.4%)を合わせた《認知度》は55.6%となっている。

○利用区分別では、《認知度》は、一般家庭用と店舗併用等で64.2%と最も高くなっている。

○給水方式別では、《認知度》は、直圧直結給水方式で61.7%、次いで、増圧直結給水方式が61.5%となっている。

② 浄水場の耐震化や水道管の耐震強化などの取組の認知度（属性別）〈図表 2-4-2〉

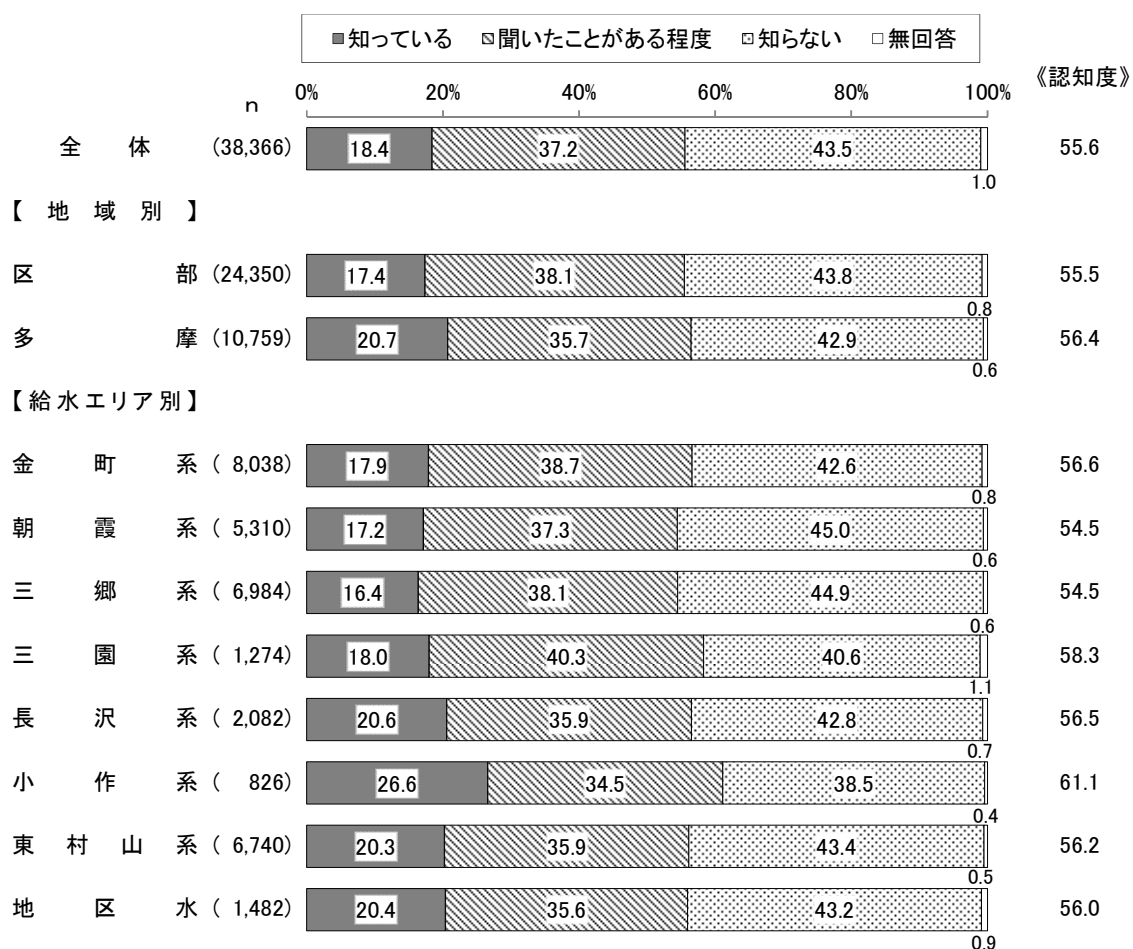


<特徴>

- 性別では、《認知度》は、男性（63.6%）の方が女性（50.3%）より13.3ポイント高くなっている。
- 年齢別では、《認知度》は、20代（34.0%）で最も低く、それ以降は年齢が上がるにつれ割合は高くなり、70歳以上（63.6%）で最も高くなっている。
- 性／年齢別では、《認知度》は、男女とも20代（男性：37.5% 女性：32.6%）で最も低く、それ以降は年齢が上がるにつれ割合は高くなり、男性の70歳以上（71.3%）、女性の60代と70歳以上（それぞれ57.3%）で最も高くなっている。

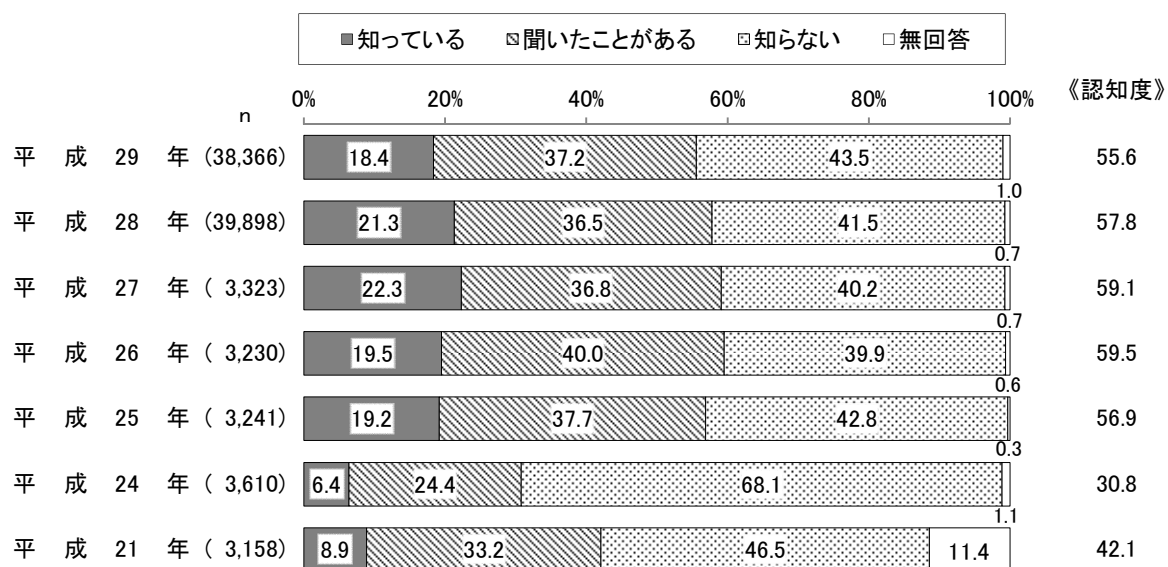
③ 浄水場の耐震化や水道管の耐震強化などの取組の認知度（地域別、給水エリア別）

〈図表2-4-3〉



- 地域別では、区部と多摩の割合に特に大きな違いはみられない。
- 給水エリア別では、《認知度》は、小作系（61.1%）で最も高くなっている。

④ 浄水場の耐震化や水道管の耐震強化などの取組の認知度（時系列：全体）〈図表2-4-4〉



＜特徴＞

○前年度調査との比較では、《認知度》に特に大きな違いは見られない。

平成27年度から平成29年度までの3年間の傾向では、《認知度》が6割近くから5割台半ばに減少傾向となっている。

(2) 大規模浄水場の老朽化が進んでいることの認知度

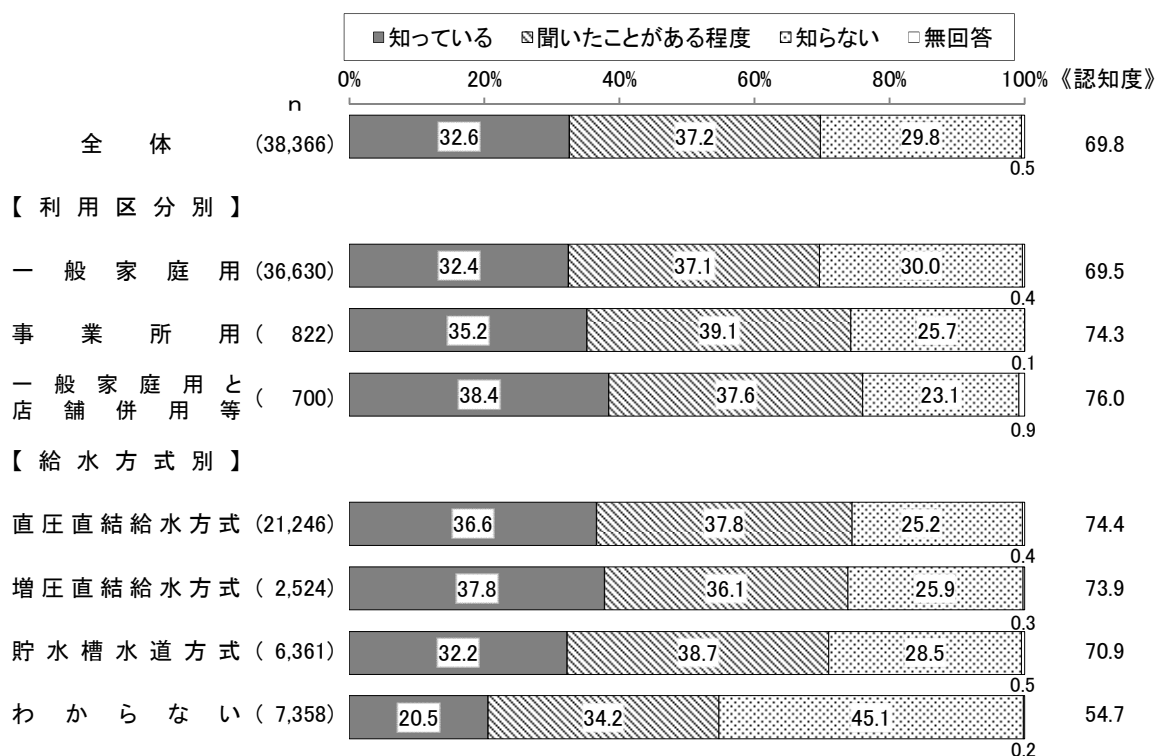
問 東京都の大規模浄水場は、昭和30年代後半からの高度経済成長期の需要増に対応するために整備されたものが多く、現在老朽化が進んでいることをご存知ですか。

- 1) 知っている                      2) 聞いたことがある程度                      3) 知らない

[C : 問9]

[調査結果]

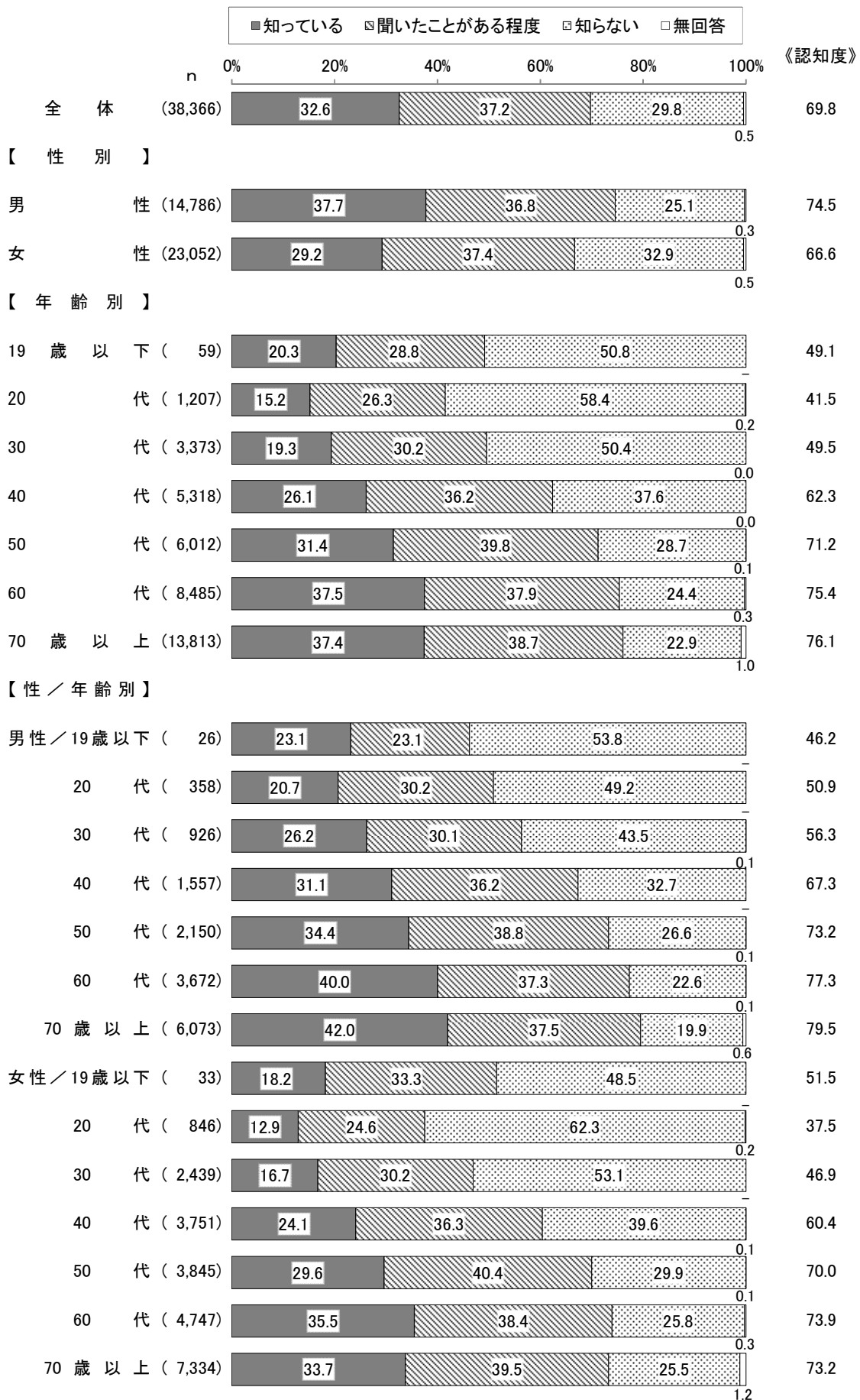
① 大規模浄水場の老朽化が進んでいることの認知度（利用区分別、給水方式別）〈図表2-4-5〉



<特徴>

- 全体で見ると「聞いたことがある程度」が37.2%で最も高く、「知っている」(32.6%)を合わせた《認知度》は69.8%となっている。
- 利用区分別では、《認知度》は、一般家庭用と店舗併用等で76.0%と最も高くなっている。
- 給水方式別では、《認知度》は、直圧直結給水方式で74.4%と最も高く、次いで、増圧直結給水方式で73.9%となっている。

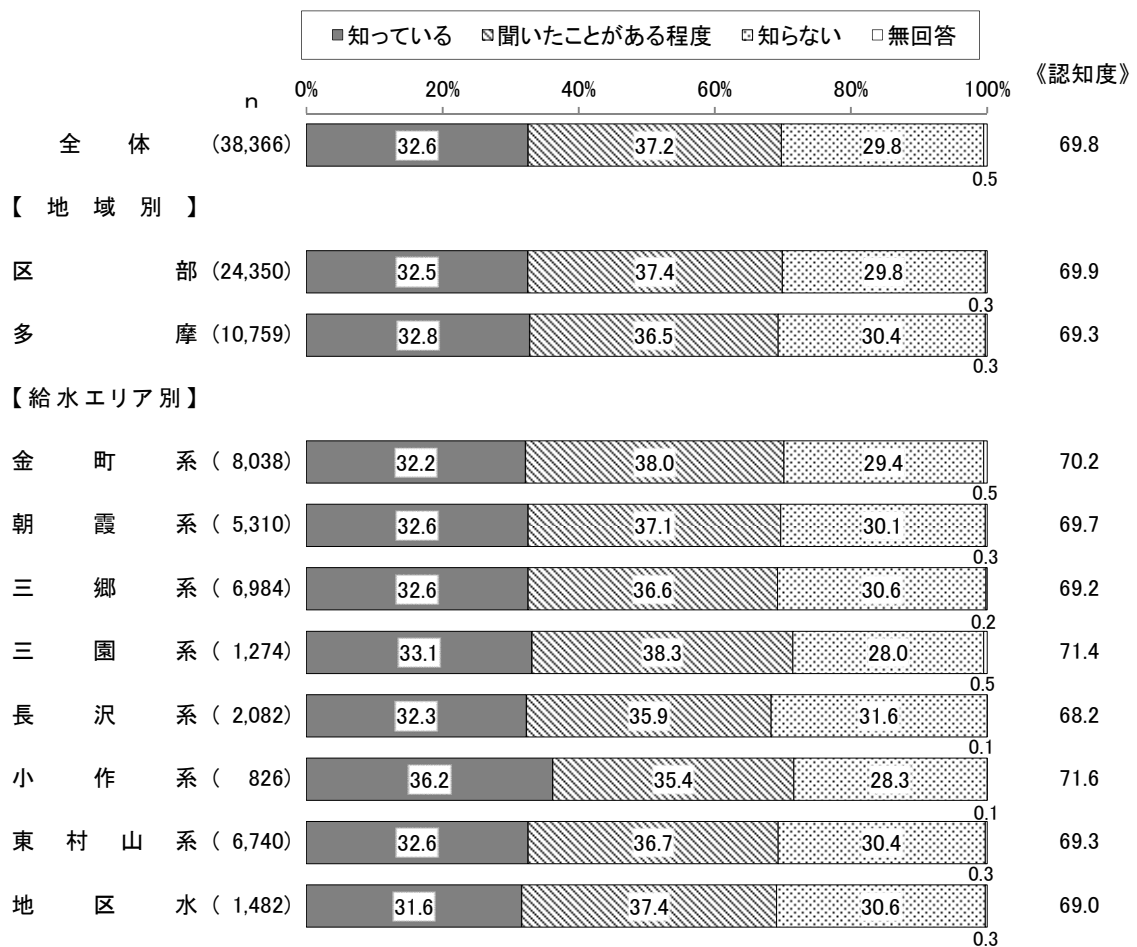
② 大規模浄水場の老朽化が進んでいることの認知度（属性別）〈図表2-4-6〉



<特徴>

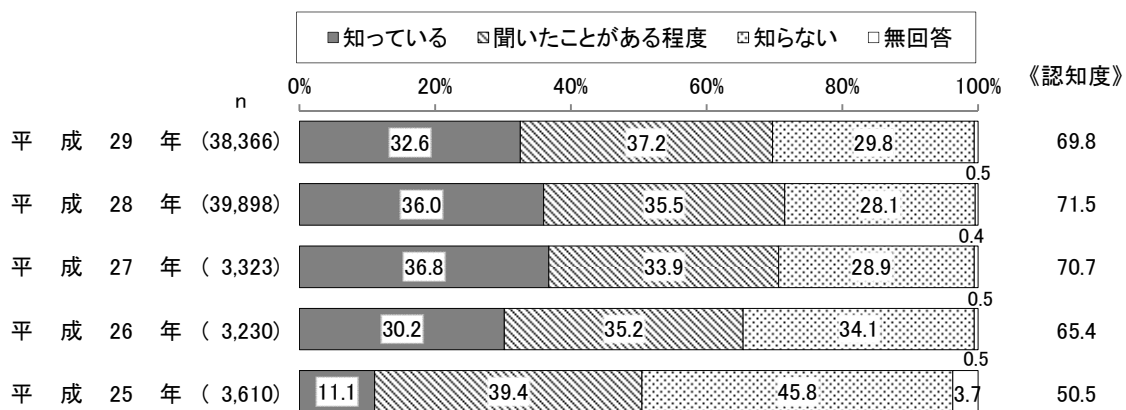
- 性別では、《認知度》は、男性（74.5%）の方が女性（66.6%）より7.9ポイント高くなっている。
- 年齢別では、《認知度》は、20代（41.5%）で最も低く、それ以降は年齢が上がるにつれ割合は高くなり、70歳以上（76.1%）で最も高くなっている。
- 性／年齢別では、《認知度》は、男性の70歳以上（79.5%）で最も高く、次いで男性の60代（77.3%）となっている。

③ 大規模浄水場の老朽化が進んでいることの認知度（地域別、給水エリア別）〈図表2-4-7〉



- 地域別では、区部と多摩の割合に特に大きな違いはみられない。
- 給水エリア別でも、特に大きな違いはみられない。

④ 大規模浄水場の老朽化が進んでいることの認知度（時系列：全体）〈図表 2-4-8〉



<特徴>

○前年度調査との比較では、特に大きな違いはない。

平成27年度から平成29年度までの3年間の傾向でも、特に大きな違いはなく、《認知度》が7割前後で推移している。



(3) 震災に備えた「飲料水」の確保状況

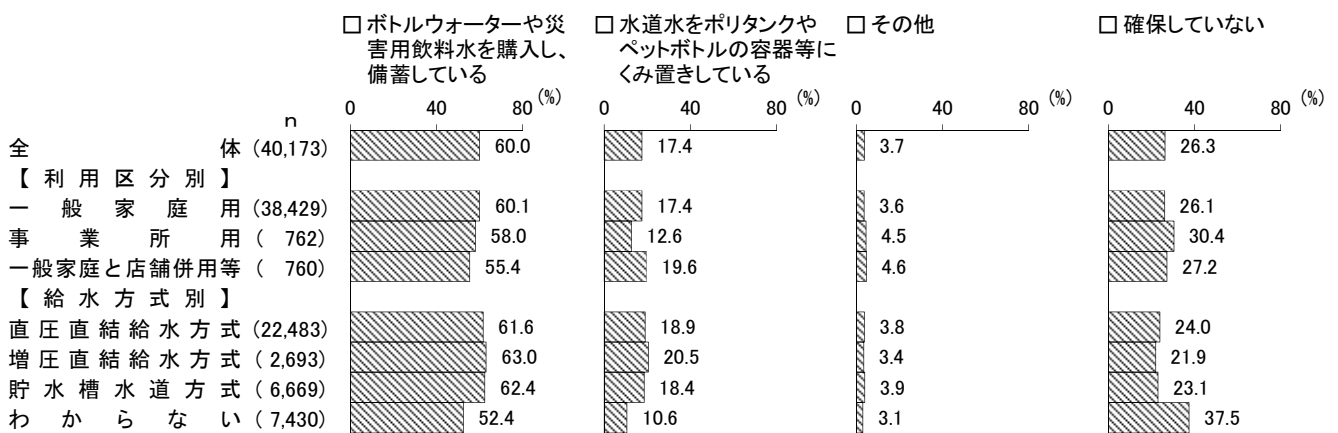
問 日頃から震災等に備えて「飲料水」をどのような方法で確保していますか。(複数回答可)

- 1) 水道水をポリタンクやペットボトルの容器等にくみ置きしている
- 2) ボトルウォーターや災害用飲料水を購入し、備蓄している
- 3) その他
- 4) 確保していない

[A : 問12]

[調査結果]

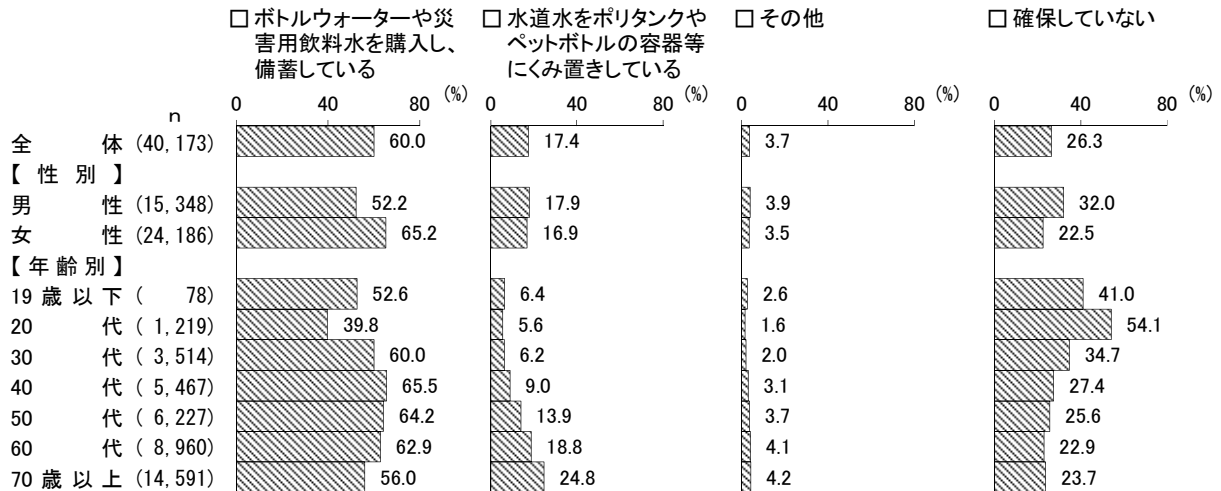
① 震災に備えた「飲料水」の確保状況（利用区分別、給水方式別）〈図表2-4-9〉



<特徴>

- 全体で見ると、「ボトルウォーターや災害用飲料水を購入し、備蓄している」が60.0%で最も高く、以下、「確保していない」(26.3%)、「水道水をポリタンクやペットボトルの容器等にくみ置きしている」(17.4%)、「その他」(3.7%)となっている。
- 利用区分別では、「ボトルウォーターや災害用飲料水を購入し、備蓄している」は、一般家庭用で60.1%と最も高くなっている。一方、「確保していない」は、事業所用(30.4%)で最も高くなっている。
- 給水方式別では、「ボトルウォーターや災害用飲料水を購入し、備蓄している」は、増圧直結給水方式で63.0%と最も高く、「水道水をポリタンクやペットボトルの容器等にくみ置きしている」においても、増圧直結給水方式で20.5%と最も高くなっている。

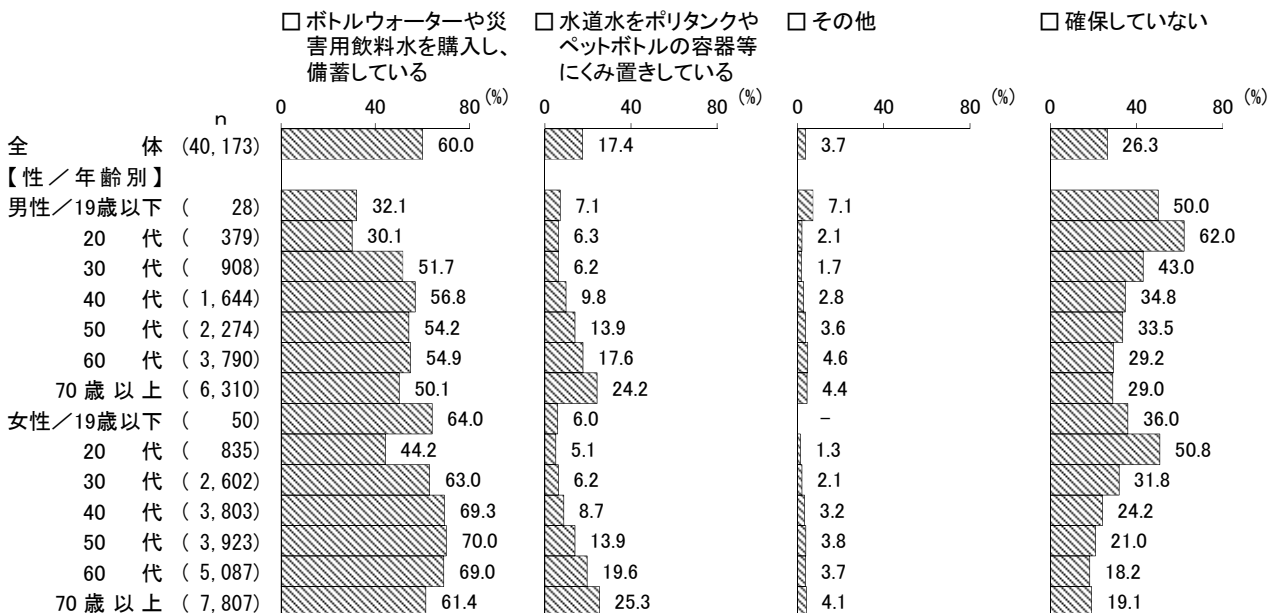
② 震災に備えた「飲料水」の確保状況（性別、年齢別）〈図表2-4-10〉



<特徴>

- 性別では、「ボトルウォーターや災害用飲料水を購入し、備蓄している」は、女性（65.2%）の方が男性（52.2%）より13.0ポイント高くなっている。一方、「確保していない」は、男性（32.0%）の方が女性（22.5%）より9.5ポイント高くなっている。
- 年齢別では、「ボトルウォーターや災害用飲料水を購入し、備蓄している」は、40代（65.5%）で最も高く、20代（39.8%）で最も低くなっている。「水道水をポリタンクやペットボトルの容器等にくみ置きしている」は、おおむね年齢が上がるにつれ高くなり、70歳以上（24.8%）で最も高くなっている。一方、「確保していない」は、20代（54.1%）で5割台半ばと最も高くなっている。

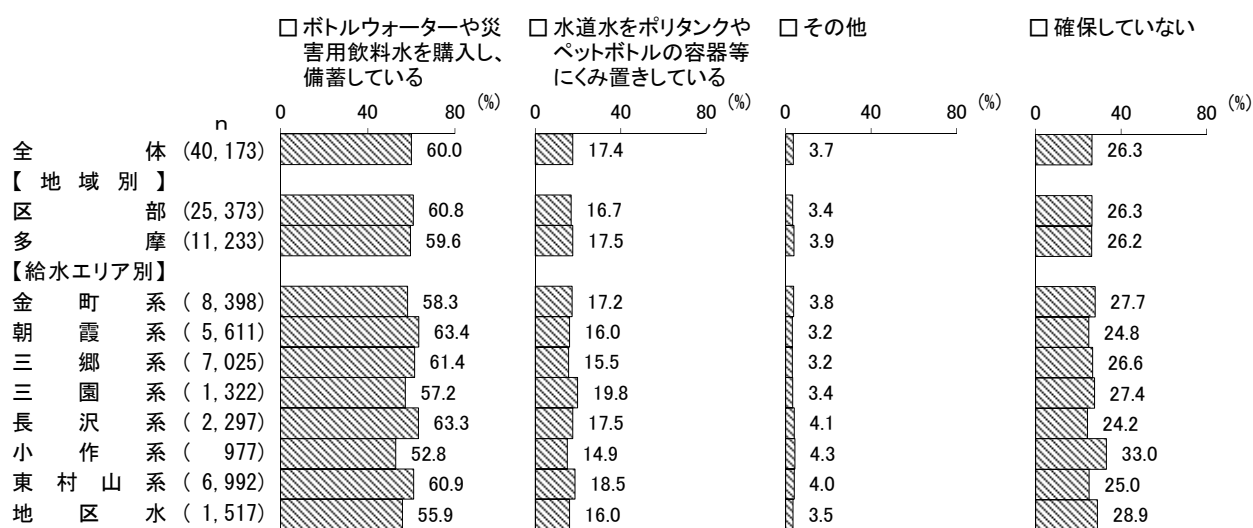
③ 震災に備えた「飲料水」の確保状況（性／年齢別）〈図表2-4-11〉



<特徴>

- 性／年齢別では、「ボトルウォーターや災害用飲料水を購入し、備蓄している」は、女性の50代（70.0%）で最も高くなっている。女性では20代（44.2%）以外の全ての年代で6割を超えているが、男性ではどの年代も6割に満たない。

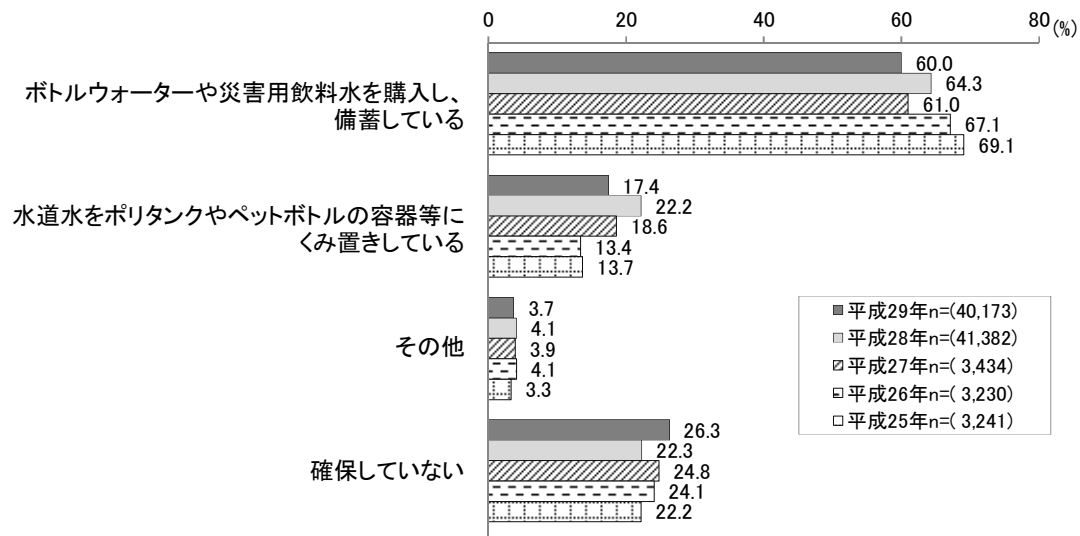
④ 震災に備えた「飲料水」の確保状況（地域別、給水エリア別）〈図表2-4-12〉



<特徴>

- 地域別では、区部と多摩の割合に特に大きな違いはみられない。
- 給水エリア別では、「ボトルウォーターや災害用飲料水を購入し、備蓄している」は、朝霞系（63.4%）で最も高く、次いで長沢系（63.3%）となっている。一方、「確保していない」は、小作系（33.0%）で最も高くなっている。

⑤ 震災に備えた「飲料水」の確保状況（時系列：全体）〈図表2-4-13〉

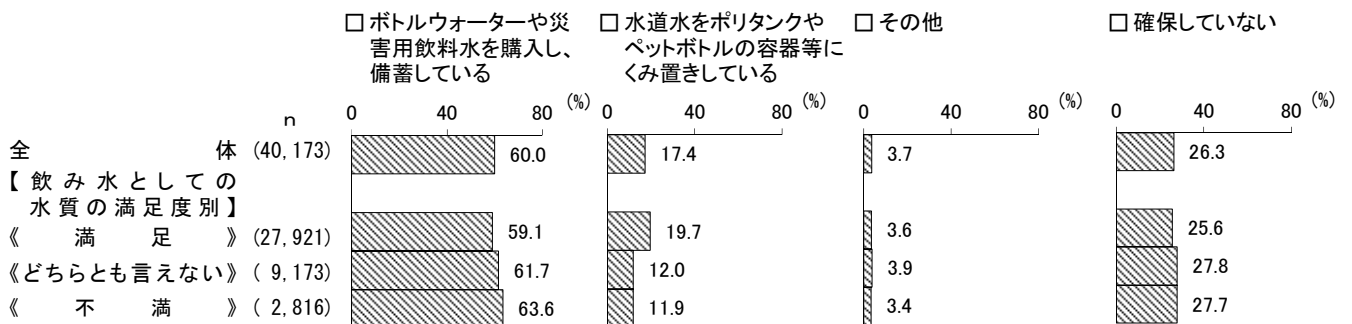


<特徴>

○前年度調査との比較では、「ボトルウォーターや災害用飲料水を購入し、備蓄している」は、前年度調査（64.3%）に比べて、今回調査（60.0%）で4.3ポイント減少した。  
 また、「水道水をポリタンクやペットボトルの容器等にくみ置きしている」も、前年度調査（22.2%）に比べて、今回調査（17.4%）で4.8ポイント減少している。  
 平成27年度から平成29年度までの3年間の傾向では、特に大きな違いはなく、「ボトルウォーターや災害用飲料水を購入し、備蓄している」は6割から6割台半ばで推移し、「確保していない」は2割強から2割台半ばで推移している。

[詳細分析]（分析の軸はA票の設問）

⑥ 震災に備えた「飲料水」の確保状況（飲み水としての水質の満足度別）〈図表2-4-14〉



<特徴>

○飲み水としての水質の満足度別では、「ボトルウォーターや災害用飲料水を購入し、備蓄している」は、飲み水としての水質に《不満》な人（63.6%）の方が《満足》な人（59.1%）より4.5ポイント高くなっている。一方、「水道水をポリタンクやペットボトルの容器等にくみ置きしている」は、《満足》な人（19.7%）の方が《不満》な人（11.9%）より7.8ポイント高くなっている。

(4) 震災に備えて「飲料水」を確保していない理由

問 <前問で「4 確保していない」と回答した方のみにお尋ねします。>

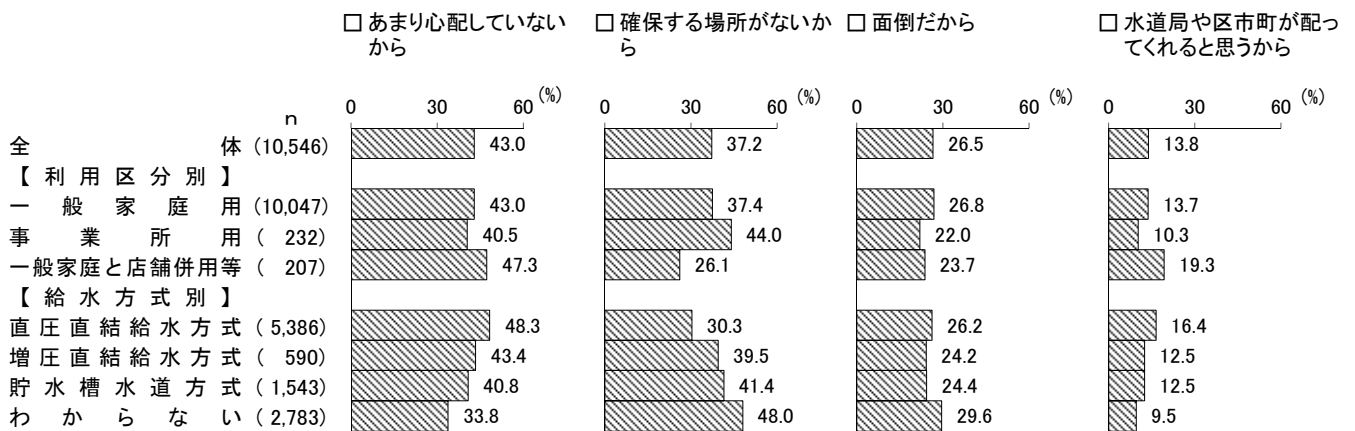
飲料水を確保しない理由は何ですか。(複数回答可)

- 1) あまり心配していないから
- 2) 確保する場所がないから
- 3) 面倒だから
- 4) 水道局や区市町が配ってくれると思うから

[A : 問 13]

[調査結果]

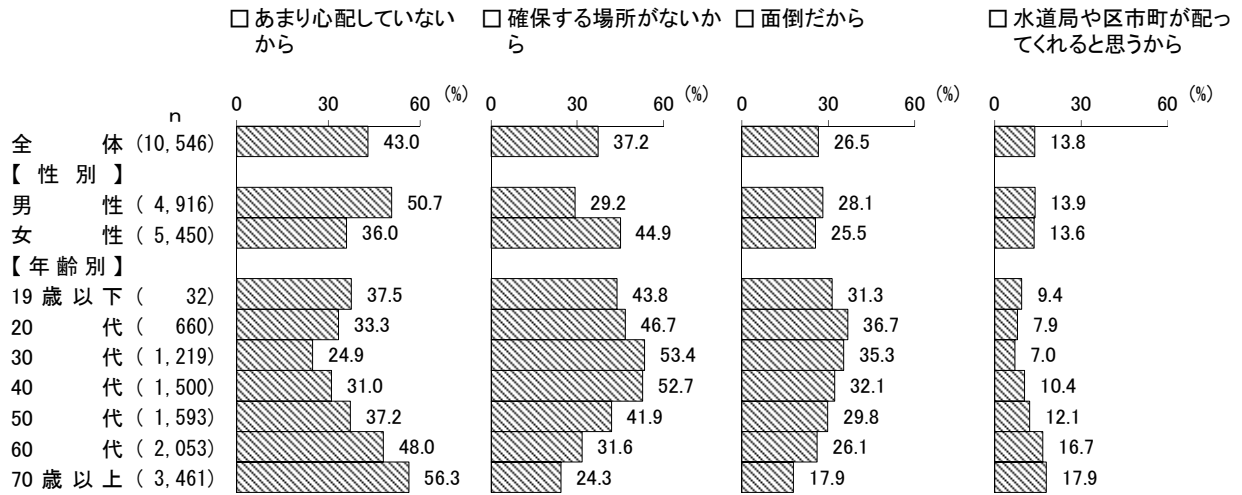
① 震災に備えて「飲料水」を確保していない理由（利用区分別、給水方式別）〈図表 2-4-15〉



<特徴>

- 全体で見ると、「あまり心配していないから」が43.0%で最も高くなっている。以下、「確保する場所がないから」(37.2%)、「面倒だから」(26.5%)、「水道局や区市町が配ってくれると思うから」(13.8%)となっている。
- 利用区分別では、「あまり心配していないから」は、一般家庭と店舗併用等で47.3%と最も高く、「確保する場所がないから」は、事業所用で44.0%と最も高くなっている。
- 給水方式別では、「あまり心配していないから」は、直圧直結給水方式 (48.3%) が最も高くなっているが、一方、「確保する場所がないから」では、直圧直結給水方式 (30.3%) が最も低くなっている。

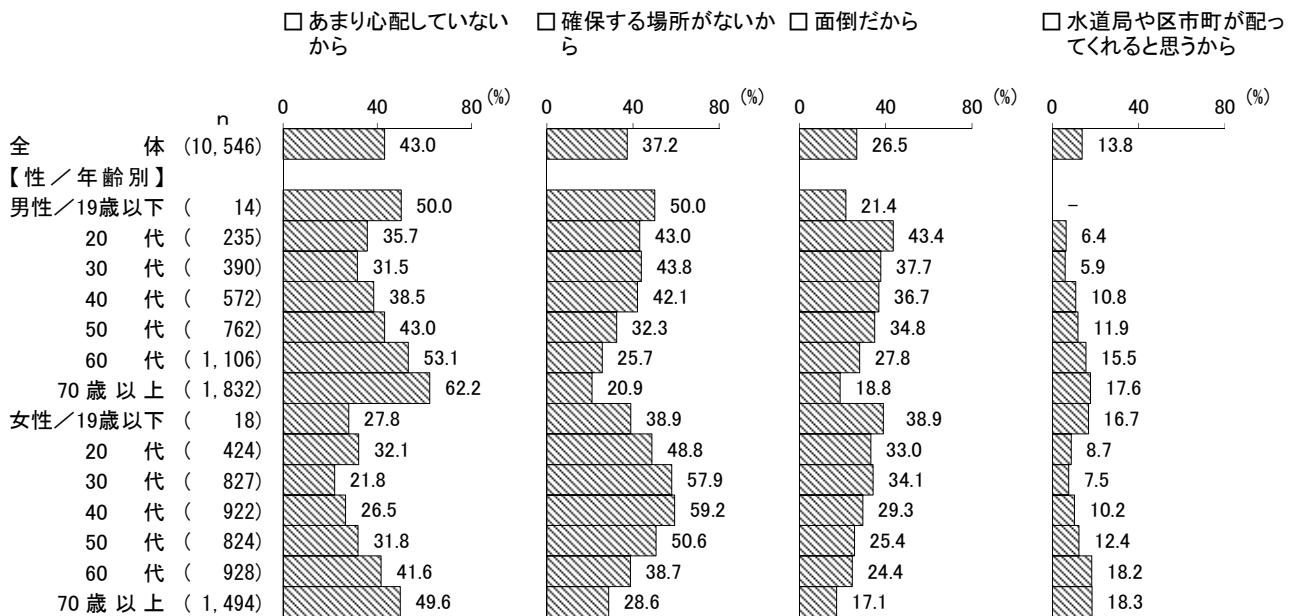
② 震災に備えて「飲料水」を確保していない理由（性別、年齢別）〈図表2-4-16〉



<特徴>

- 性別では、「あまり心配していないから」は、男性（50.7%）の方が女性（36.0%）より14.7ポイント高く、逆に、「確保する場所がないから」は、女性（44.9%）の方が男性（29.2%）より15.7ポイント高くなっている。
- 年齢別では、「あまり心配していないから」は、30代（24.9%）で最も低く、それ以降は年齢が上がるにつれ割合は高くなり、70歳以上（56.3%）で最も高くなっている。「確保する場所がないから」は、30代（53.4%）で最も高く、また、「面倒だから」では、20代（36.7%）で最も高く、それ以降は年齢が上がるにつれ割合は低くなっている。

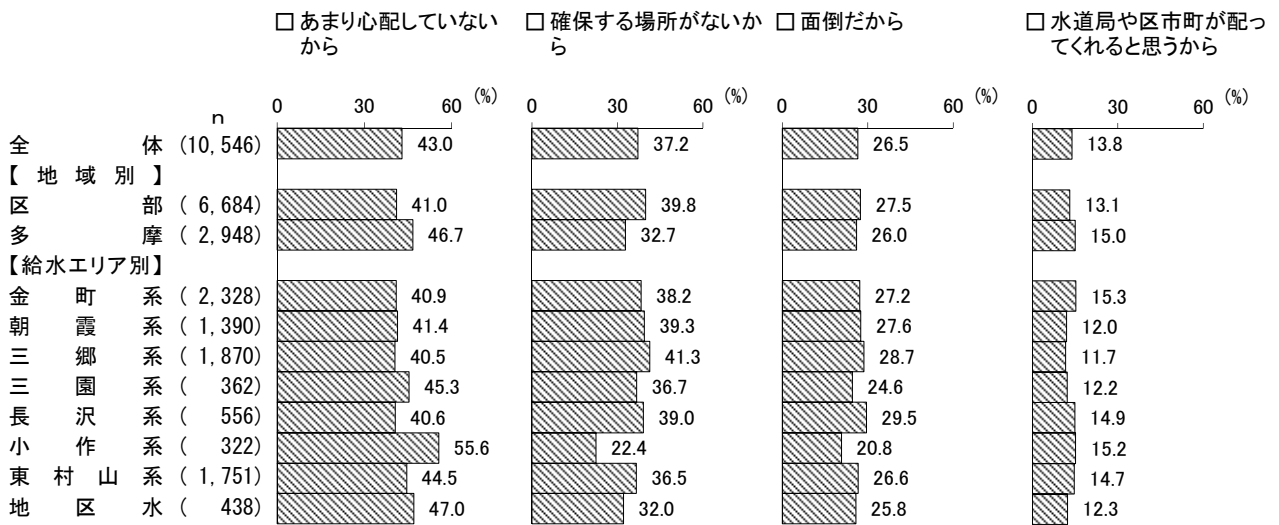
③ 震災に備えて「飲料水」を確保していない理由（性／年齢別）〈図表2-4-17〉



<特徴>

- 性／年齢別では、「あまり心配していないから」は、男性の70歳以上（62.2%）で最も高くなっている。「確保する場所がないから」は、男性と女性の傾向が異なり、女性では40代（59.2%）を頂点とした山形の傾向に対し、男性ではおおむね年齢が上がるにつれ割合は低くなっている。また、「面倒だから」は男性の20代（43.4%）で最も高くなっている。

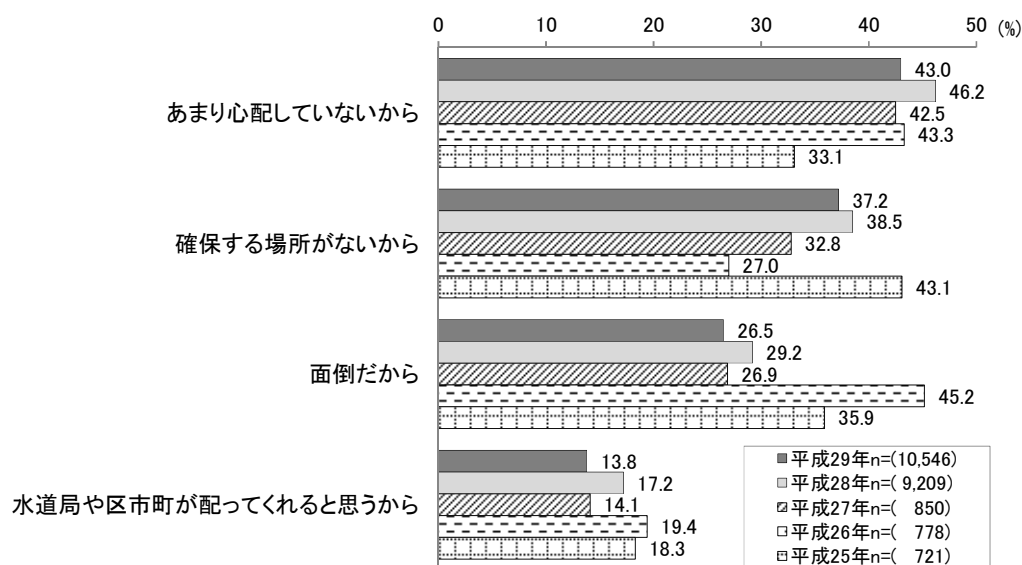
④ 震災に備えて「飲料水」を確保していない理由（地域別、給水エリア別）〈図表2-4-18〉



<特徴>

- 地域別では、「あまり心配していないから」は、多摩（46.7%）が区部（41.0%）より5.7ポイント高く、一方、「確保する場所がないから」は、区部（39.8%）が多摩（32.7%）より7.1ポイント高くなっている。
- 給水エリア別では、「あまり心配していないから」は小作系（55.6%）が5割台半ばで最も高く、「確保する場所がないから」は三郷系（41.3%）で最も高くなっている。

⑤ 震災に備えて「飲料水」を確保していない理由（時系列：全体）〈図表2-4-19〉



<特徴>

○前年度調査との比較では、「あまり心配していないから」は、今回調査(43.0%)が、前年度調査(46.2%)から3.2ポイント減少しており、「水道局や区市町が配ってくれると思うから」も、今回調査(13.8%)は前年度調査(17.2%)から3.4ポイント減少している。

平成27年度から平成29年度までの3年間の傾向では、「確保する場所がないから」が3割強から4割近くに増加傾向となっている。



(5) 最寄の災害時給水ステーションの認知度

問 最寄りの災害時給水ステーション（給水拠点※）をご存じですか。

※給水拠点 地震等が発生し、断水になった時、公園や浄水場・給水所などで応急給水を受けることができる場所。

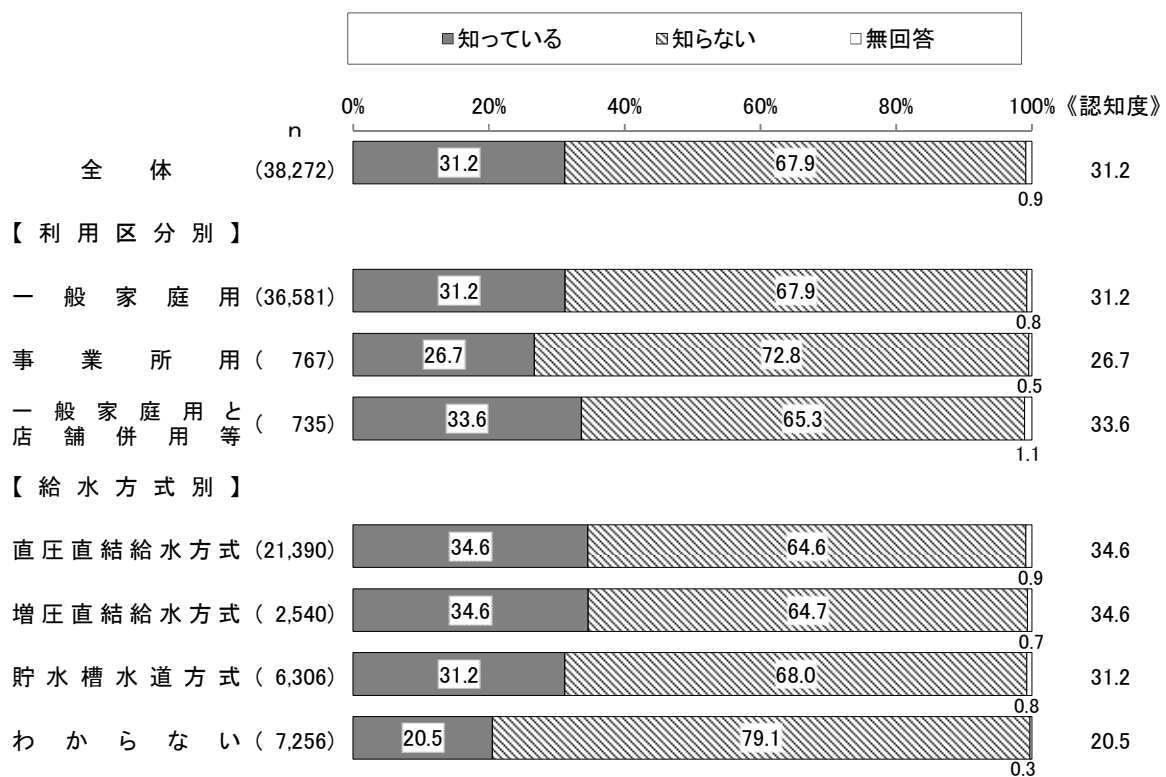
1) 知っている

2) 知らない

[B : 問 11]

[調査結果]

① 最寄の災害時給水ステーションの認知度（利用区分別、給水方式別）〈図表 2-4-20〉



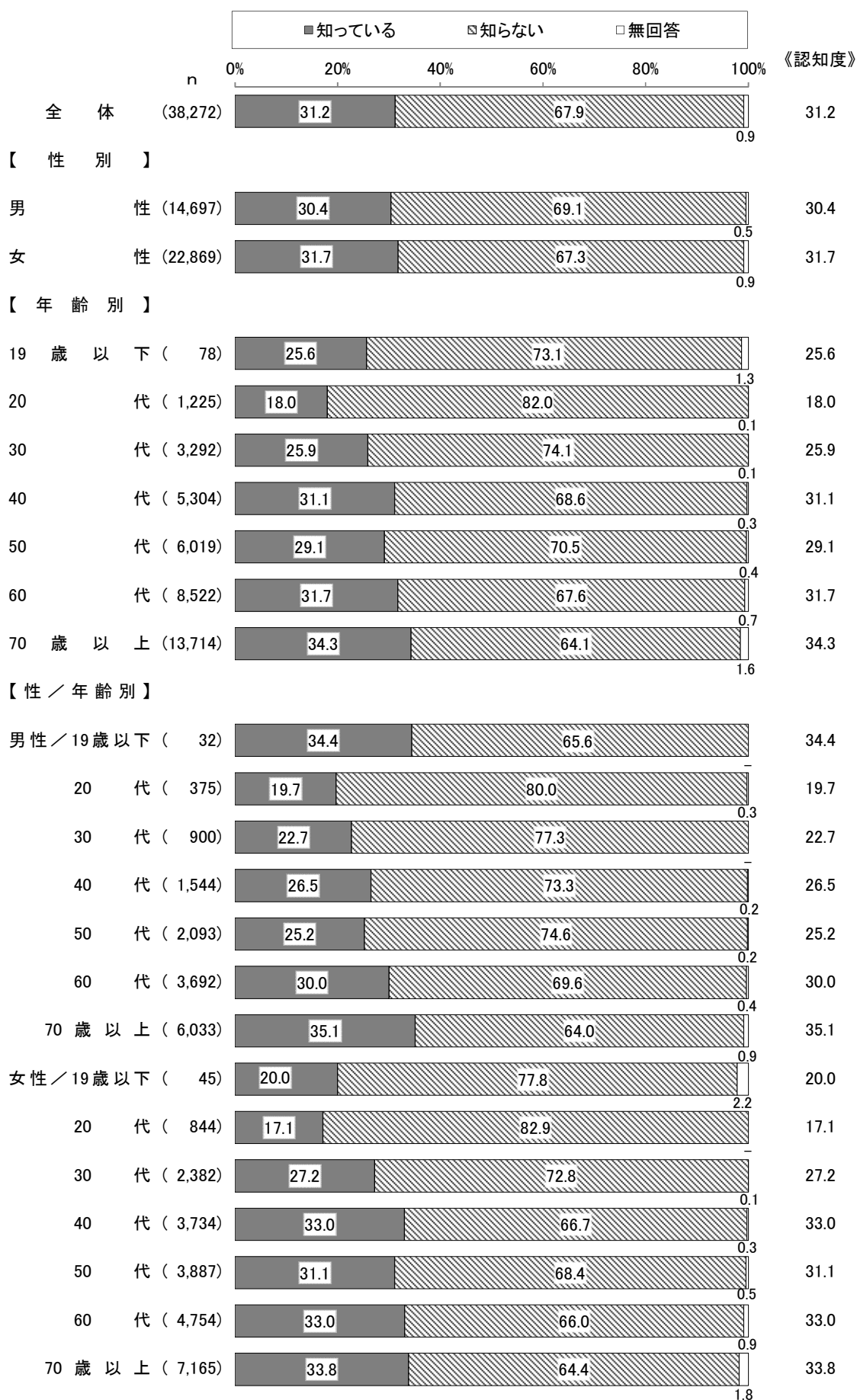
<特徴>

○全体でみると、「知っている」は31.2%で、「知らない」が67.9%となっている。

○利用区分別では、「知っている」は、一般家庭用と店舗併用等で33.6%と最も高くなっている。

○給水方式別では、「知っている」は、直圧直結給水方式と増圧直結給水方式でそれぞれ34.6%と最も高くなっている。

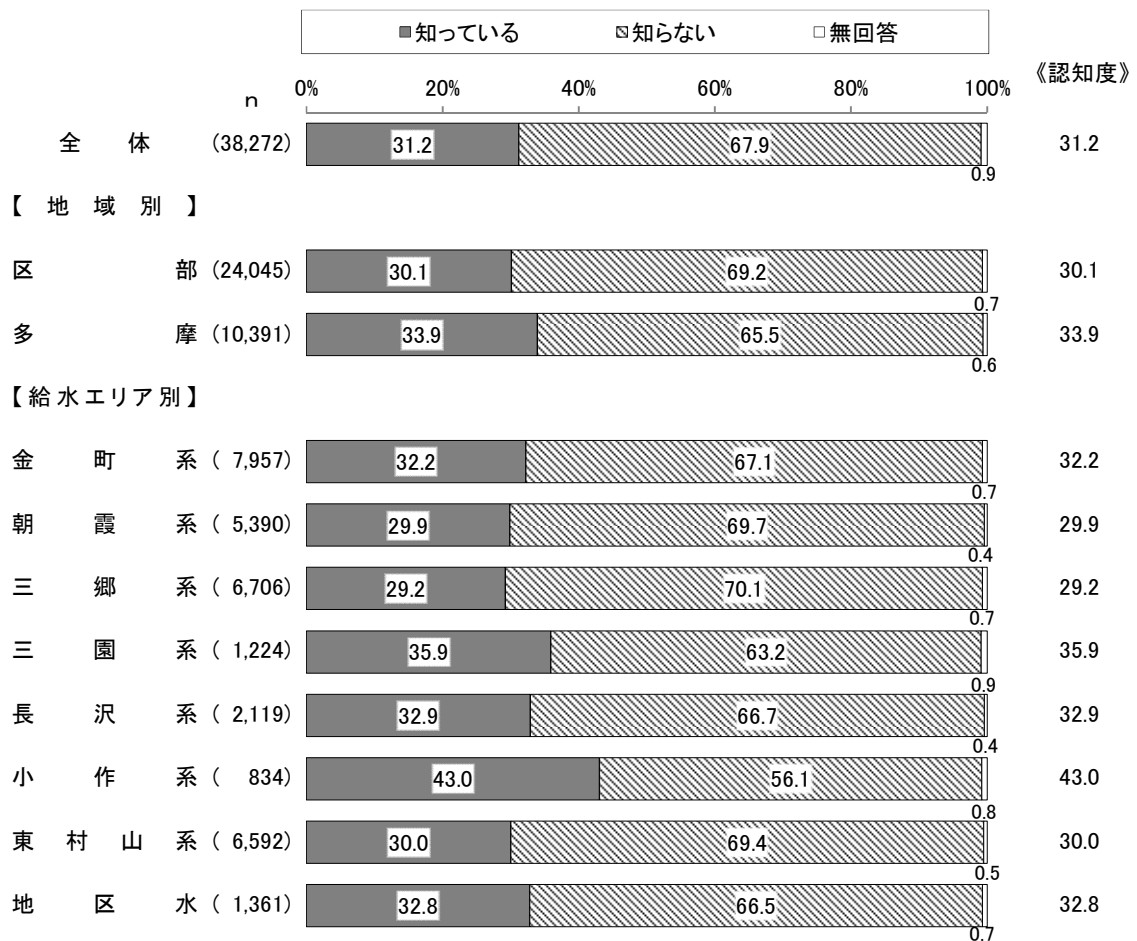
② 最寄の災害時給水ステーションの認知度（属性別）〈図表 2-4-21〉



<特徴>

- 性別では、特に大きな違いはみられない。
- 年齢別では、「知っている」は、20代（18.0%）で最も低く、それ以降はおおむね年齢が上がるにつれ高くなり、70歳以上（34.3%）で最も高くなっている。
- 性／年齢別では、「知っている」は、女性の20代（17.1%）で最も低く、男女ともに20代以降はおおむね年齢が上がるにつれ高くなっている。

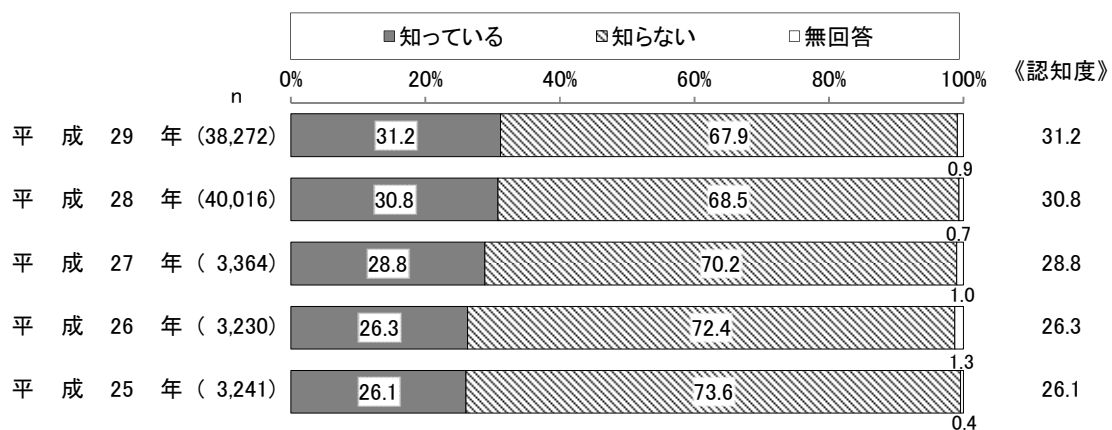
③ 最寄の災害時給水ステーションの認知度（地域別、給水エリア別）〈図表2-4-2〉



<特徴>

- 地域別では、「知っている」は、多摩（33.9%）の方が区部（30.1%）より3.8ポイント高くなっている。
- 給水エリア別では、「知っている」は、小作系（43.0%）が最も高く、三郷系（29.2%）で最も低くなっている。

④ 最寄の災害時給水ステーションの認知度（時系列：全体）〈図表 2-4-23〉



○前年度調査との比較では、特に大きな違いはみられない。

平成27年度から平成29年度までの3年間の傾向でも、特に大きな違いはなく、《認知度》は3割前後で推移している。